大谷教師塾
教員養成ナビゲーター

大谷大学
教職支援センター

第100号記念特大号

2012. 7. 12

『大谷教師塾』100号を祝す

大谷大学学長　草野　顕之

大谷大学教職支援センターが，教員を目指す学生支援のために刊行し続けている教職支援センターだより『大谷教師塾』が100号目を迎えるという。これまで，各号に学生を励ます文章を寄せていただいたセンター長を始めとするセンター員や教職アドバイザーの先生方，また編集を担当していただいている事務局の方々に，あつく御礼を申し上げたい。

さて，大谷大学の教職課程は，それまで文学部の各学科で取得できた中等教員免許に加えて，2009年に新設された教育・心理学科において初等教員免許が取得できることとなった。これにより，幼稚園から高等学校までの，全ての学校において活躍できる教員養成が大谷大学でできるようになったのである。

この教育･心理学科設置の趣旨を述べた文章には，大谷大学の建学の精神を表わす第三代学長佐々木月樵の『大谷大学樹立の精神』にある「仏教を教育を通して国民に普及する」という目的の実現を，これまでは中等教員の養成によって行おうとしてきたが，現代の中学校・高等学校での教育の荒廃（例えば，いじめ・不登校・学級崩壊・学力低下など）は小学校へも及んでおり，初等教育においても宗教的情操を備え，生徒の目線にたった教育を行える教員を育て，彼らを通じて生きることの喜びと他者を思いやる心を持った子どもたちを育てることでしか解決しえないと強く主張している。

さらに，現在の教育制度のもとでは教室で直接的な宗教教育を行うことはできないが，宗教的情操を備えた教員の言葉や行動が，生徒の心に大きな影響を与えることが期待できるとし，それは佐々木月樵のいう「教育は常に宗教を俟つて真実の人格を作る」という言葉とも一致すると，初等教育の教員養成が建学の精神に合致するものであることを確認している。

こうして誕生した教育･心理学科は，本年度で完成年度を迎えることとなる。ということは，本年度で卒業する第４学年の学生諸君は，まさにただ今，全国各地で教員採用試験に立ち向かっているのである。彼らが実力を遺憾なく発揮して，一人でも多く採用試験に合格してもらいたいと念願している。教育･心理学科の完成は，４年という年次が経過したから迎えられるのではない。一人でも多くの卒業生が教員として活躍してくれるその事実が，教育･心理学科の真の完成なのである。

これからも達成の「笑顔」を紙面に

教職支援センター　アドバイザー　細谷　僚一

前年度末，3名のアドバイザーで手分けして，本学学生のボランティア受け入れ校に出かけた。日頃のご指導のお礼とそれぞれの学生の様子を知るためであった。

出かける前は，受け入れ校から苦情を聞くのではないかと少し心配した。訪問を重ねていくうちに，この思いは霧散した。訪問校は合計35校。ボランティア受け入れ校の一部に過ぎないが，訪問したどの学校からも好意的な評価を得ることができた。

「大谷大学の学生は，子どものため，学校のためによくやってくれている」

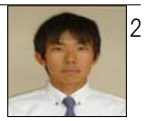
『子どものために』『学校のために』この言葉に大切にしたい。当然のことであるが，ボランティアは自発的な支援活動である。利己性でなく利他性にもとづく無償行為である。単位取得だけが目的でもなければ，他から強制されてするものでもない。

ボランティア先の先生方の思いや考えをしっかりと受け止め，『子どものために』『学校のために』進んで教育活動支援に努めることが，結果として教師を目指す自らの血となり肉となるのである。

本学学生のボランティア活動の質の高さを誇りに思う。このよき伝統を絶やすことなく，それぞれの学生が自覚し，力を合わせて受け継いでもらいたい。

本号で教職支援センターだより「大谷教師塾」は100号を迎えた。これからもボランティアを始め，教職を目指す学生の充実した取組の内容やそれを達成した「笑顔」を紙面に飾っていきたいものである。

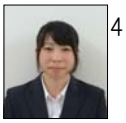
目次：

生徒と共に成長  2

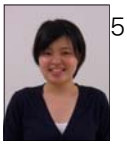
気づき･考え･行動する 2

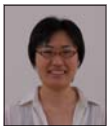
『実感』生徒と教師の信頼関係の大切さ 3

この目で確かめた子どもたちの成長 3

教師の立場からものごとをみることの大切さ  4

優れたボランティアとは 4

得たものはキラキラとした子どもの表情  5

読書案内「学校ってなんだろう」  5

受講してみてわかる自分の実力 6

生徒と共に成長

―　ボランティアや講師経験を生かし採用選考試験に臨む　―

岐阜県大垣市立西部中学校 社会科教諭　永井　教顕(ながい　のりあき)
2010.3　哲学科卒業

教育現場での経験を採用につなげる！

私は，平成24年度岐阜県公立学校教員採用選考試験において，中学校社会科で受験し合格しました。それまでの２年間は，常勤講師としての勤務と受験勉強の両立させる厳しい生活でした。「今年こそ絶対に合格するぞ！」という，強い気持ちになれたのは，応援してくださる先生方や講師仲間，家族の支えがあったからだと思います。

そして，一番の支えとなったのが,私の担任する学級の生徒たちでした。講師時代の２年間は，教科担任として,また学級担任として,生徒と触れ合い共に生活するなかで，社会科の教科指導力や学級担任として自らの手で学級を経営する力,それに生徒指導力など，教師として必要な力を学ぶことができました。この２年間の経験は，私にとって大きな自信となり,合格へとつながったのだと思います。

現在は初任者（採用1年目教員）として，岐阜県大垣市立西部中学校に勤務しています。やはり,教師として未熟さを感じる日々です。しかし,教師になった今も,生徒と共に過ごす毎日が勉強なのだと思います。生徒がわからないことを知るために一生懸命勉強するように，教師も自分の教科や学級経営について一生懸命学び続けなければいけないと思います。

そのような教師生活の中で一番の楽しみが部活動です。生徒たちと一緒に汗を流し好きな野球部指導に打ち込むこと。技術指導をすると，生徒たちは上達しようと目を輝かせながら練習に励みます。教室と同じようにグラウンドでも，生徒と共に自分も成長していると感じています。

私は大学２年生から，京都市立高野中学校で「学校支援ボランティア」と「総合育成支援員」として３年間働かせていただきました。学生時代から教育現場を経験させていただいたことが,現在でも生きています。

在学中の皆さんも「学校支援ボランティア」や「総合育成支援員」などに積極的に取り組み，現場を経験して生徒と共に学びながら教師をめざしてほしいと思います。

祝
合格

気づき･考え･行動する

―　誠実・真実・堅実　―

京都市立洛南中学校　社会科教諭　中出　健一(なかで　けんいち)
2010. 3　哲学科卒業

その時,その場で何をすべきか･･･

現在,私が勤務している洛南中学校で,生徒・教師ともに学校目標になっている言葉が「気づき・考え・行動する」です。

●**「気づき」**というのは,今まで目を向けていなかったことに目を向けることです。つまり,何かに「気持ちを向ける」ための活動です。

●**「考え」**とは「気づき」から一歩進み,「この時,この場所で何をすべきか」身の回りで起きていることについて認識し,理解したことや知り得た情報について,主体的に「考え」どうすればよいかを判断することです。

●**「行動する」**は,考えたことを実際に行動に移すということです。

そして,この「行動する」ということが大切と考え,「目指す生徒像」として「三実」に示しています。

「三実」とは,

- **誠実(心を込め,思いが伝わる行動がとれる)**
- **真実(正しい判断と責任ある行動がとれる)**
- **堅実(確実に力を積み上げ,自らの進路を切り拓く)**

です。

学校現場では,授業が大切と言われますが,いい授業をするためには,教師自身が気づき・考え・行動し,生徒との「信頼関係」づくりを築くことが大切です。具体的には,休み時間・放課後など,できるかぎり生徒とコミュニケーションをとり,人間関係をつくることが必要です。そして,教材研究を深め,生徒が主体的に考えようとする発問を練ったり,適切な資料を準備したりするなどして,よりよい授業を生徒たちに提供することが大切です。

また,教育課題として最近よく取り上げられることに,生徒たちの規範意識の向上があります。良いことは良い・悪いことは悪いという正しい判断力と責任ある行動力を確実に生徒に与えたいものです。そのためには,様々な状況や場面に対応できる「是々非々を線引きする力」を生徒自身にもたせることが必要です。

今,教職を目指しているみなさんも「その時,その場で自分は何をすべきか」を「気づき・考え・行動する」ことを実践してみて下さい。

祝
合格

学生ボランティア報告・説明会

2012.5.30

『実感』生徒と教師の信頼関係の大切さ

― 滋賀県スクールサポーターで学んだこと ―

歴史学科　第3学年　川﨑　優海（かわさき　ゆうみ）

学生ボランティア報告①

私は滋賀県の中学校へスクールサポーターとして派遣されました。

滋賀県のスクールサポーターという制度は教師を目指している全ての学生が対象になります。ねらいは児童・生徒の支援などを通し教育活動を経験することにより教職の専門性を身につけることです。

私が行った期間はわずか二週間でしたが，多くのことを感じ取り，考え，学ぶことができました。

派遣先の学校では，様々な体験をさせていただきました。その一つとして部活動の指導も体験できました。種目は女子バレーボール部でした。私にとって経験のない競技だったので，最初はそばで見学するだけでした。それではいけないと考え，土日も部活動へ参加するようにしました。すると次第に生徒と言葉を交わすなど交流も増え，私にとっては大変嬉しい結果になりました。試合では，生徒とのプレーを熱く応援する自分の姿があり，試合結果の喜びを生徒とともに分かち合うことができました。このことで生徒と教師の信頼関係の重要さや手ごたえを実感することができました。

生徒とのかかわり方や生徒対応でない仕事を安易に考えていましたが，実際に現場へ行く様々な業務内容があり肉体的，精神的に大変なことがわかりました。このことは現場に行かないと絶対わからないものです。また，これまで漠然としていた教師という職業への責任感の重さを再確認することができました。

スクールサポーターとして派遣されたことがきっかけとなり，教師という職業に就きたいという気持ちがさらに強くなりました。

これからも生徒に信頼される教師を目指し，日々励みたいと考えています。

この目で確かめた子どもたちの成長の姿

教育・心理学科　第2学年　赤井　將太（あかい　しょうた）

学生ボランティア報告②

私は大学１年生の４月から京都市の小学校で朝のあいさつ運動ボランティアと授業補助のボランティアをしています。また将来は特別支援学級・特別支援学校の教師になることを考えているので同じ年の９月から長岡京市にある特別支援学校で授業補助のボランティアをしています。

最初は「授業補助で入る学年は何年生だろうか。」「教職員の方々に迷惑をかけたらどうしようか。」など沢山の不安がありました。またボランティアとして学校に入ったとしても子どもたちから当然のように「赤井先生」と呼ばれることには嬉しさを伴う戸惑いがありました。

しかし，昨年の大谷大学「ボランティア報告会」での「何でも自分から動かなくては何も始まらない。」という先輩の言葉から「自分も何かしなければならない」と思い，授業中や休み時間の子どもたちの様子や先生の言葉を自分なりにまとめた『ボランティアノート』をつくることにしました。

私は１年間，１つの学校にボランティアとして行くことで大学の授業では学ぶことのできないものを様々な経験を通して学ぶことができました。その中で私の大きな収穫になったことは子どもたちが成長する姿をこの目で見ることができたことです。私は昨年，小学６年生のクラスに配属されました。学校行事や大文字駅伝，そして卒業式などの経験を重ねる中で子どもたちの成長には目をみはるものがありました。

私は今，授業補助のボランティアとして，小学１年生のクラスに入っています。まだまだ幼稚園や保育園の気分が抜けきっていない子どもや少しホームシックになっている子などがいて，昨年に授業補助で入っていた小学６年生と大きく違っています。

しかし，共通していることがあります。それはボランティアとして教室に入り，子どもたちと関わっていると一人一人の個性や成長が見えてくることです。今後も，より多くの子どもたちと出会い，かかわることで教師になるために様々なことを発見し，学んでいきたいと考えています。

教師の立場からものごとを見ることの大切さ

教育・心理学科　第3学年　髙橋　茉由（たかはし　まゆ）

学生ボランティア
報告
③

私は，第1学年の後期から小学校のボランティアを始めました。始めてから半年間ほどは，何をしたらいいのかが分かりませんでした。しかし，ボランティア先におられたＡ先生のアドバイスをきっかけに，どのようにボランティアとして子どもたちに向かい合えばよいかが分かるようになりました。

それは，この言葉です。

「教師の立場でものごとを見ること」

さらに続けて，このようなこともおっしゃっていました。

「学校ボランティア活動を行っている学生は，ボランティアをするためだけに学校に行っている人が多い。そういう学生は，自分が教師になって子どもたちの前に一人で立った時に，どうしたらいいか分からなくなる」

ボランティアの活動では，担任の教師の指示に従います。一人で何かすることはほとんどありません。その状態になれて，ボランティアにずっと行っていると，いざ教師になって子どもたちの前に立ったときにどうしたらいいか分からなくなる，という意見なのです。だからその先生は，「教師の立場に立って，取り組めばよい」とアドバイスをしてくださったのです。

私は，その言葉をきっかけに教師の立場から教育現場を見るように心がけました。そうすると，それまで気付かなかったところにも，目が届くようになりました。自分だったらこうするという案もでるようになりました。

これからも，私は教師の立場からものごとを見ることを忘れずに，ボランティアに取り組みたいと考えています。そして，そのときに気付いたことを次の学びにつなげて，教師になるための学びをさらに深めていきたいと考えています。

優れたボランティアとは

教育・心理学科　第2学年　今田　秀亮（いまだ　ひであき）

ボランティアリーダー
養成講座
参　加

私は，4月21日から22日の一泊二日で，花背山の家での『ボランティアリーダー養成講座』に参加しました。この講座は，京都市内で行われる小学校長期宿泊自然体験活動について学ぶというものです。

学生ボランティアである私たちも，子どもたちからすれば先生であるということをしっかりと踏まえなければなりません。この講座を受講して，長期宿泊自然体験活動の目的や意義がわかり，指導者として子どもたちにどのように対応すればよいか知ることが出来ました。

講座内容は意義や目的についての講義と実際に子どもと同じ様々な活動に取り組むことでした。体験ひとつひとつのめあてや留意点などを，細かく説明を受けることによって，指導者としての心構えを養うことや，子どもたちの気持ちも理解することができるようになったと思います。したがって子どもたちのつまずきそうなこともあらかじめわかり，それに対応したアドバイスをどのようにすればよいのかもこの経験によって学ぶことが出来ました。

例えば野外炊飯の後片付けをどのようにすればよいかについてです。鍋には炭がこびりついています。この炭はとれにくく受講生の私たちでもピカピカにするのは難しいものでした。はやくきれいにするにはちょっとしたコツが必要で，この経験をしていなければこどもたちにアドバイスをすることができません。

これらのことからより優れた学生ボランティアの条件になるためには，その活動の意義や目的，子どもたちの気持ちを理解することが大切だと考えます。これらから，花背山の家を含むボランティア活動をするために，このような講座を受けることはとても役立つことだと思います。

得たものはキラキラとした「子どもの表情」

教育・心理学科　第4学年　村上　美華（むらかみ　みか）

おおたに
キッズキャンパス

3月24日の「おおたにキッズキャンパス」（オープンキャンパス同時開催），小学生と高校生を対象に「オリジナルペン立て」や「小物入れ」作りを行いました。製作を始めてもらう前にはサポーターの私たちが，見本としてあらかじめ作っておいた作品を紹介し，完成作品が想像できるようにしました。

作品を製作するグループは，小学生と高校生が混ざったグループになりました。初めは会話も少なく，各グループにいるサポーターが話を持ちかけるなどして，交流ができるように配慮しました。製作が進むにつれ，お互いにだんだんと打ち解けていくようになりました。そのきっかけになったことの一つには，小学生が高校生に対して「お姉さんのこの飾りすごいね。」という発言です。高校生が小学生にその作り方を教えたり，小学生の分まで作ってあげたりすることもありました。

さらに，５～６人の適正な規模のグループだったことから，ほかの人のアイディアを参考にし，よりよいアイディアや工夫がたくさん出てきました。

特に印象的だったのが，小学生は自分の作品だけでなく「これは〇〇にあげる分」と言って，一人でいくつも作っていたのに対して，高校生はペン立てや小物入れを自分が使う物としてとてもこだわりをもって，作っていたことです。小学生の次々と新たな作品作りに取り組むのに対して，高校生は一つの作品の細部まで時間をかけ，納得のいくまで作業をしていました。

小学生にとって，普段あまり接することのない高校生・大学生と製作を体験してもらったことで，学校では気づくことができなかった発見があったはずです。

サポーターとしてこの企画に参加ことによって，子どもの製作に対しての関心・興味や物作りへの意欲というものが肌で実感することができました。教職を目指す私にとって，このサポータの経験は，今後教師になっても生かせるものだと考えています。

読書案内

「学校って何だろう」

苅谷剛彦　著　ちくま文庫

文学科 第3学年　花田　夏生（はなだ　なつき）

学校の再発見！

私を含め，学校について様々な疑問を感じている人は多いと思います。学校について抱くこの「どうして」という疑問は，しだいに「あたりまえ」となっていきます。この本は，そういった「あたりまえ」となってしまった“学校”についての引っかかりのようなものを改めて考えてみようというものです。

学校の「あたりまえ」はよくよく考えてみれば分からないことばかりです。「どうしてこんなに規則は細かいのか」「そもそも学校に何故行くのか」といった疑問は，時間が経つにつれて「そういうものだから」と片付けて深く考えることもなくなります。

例えば「教室の形や机の配置は何故このようになっているのか」と考えたことがありますか？寺子屋の時代は今のようにみんなが同じ方向を向いて勉強していたわけではありません。それぞれがそれぞれの「前」に向かって座っていました。後に西欧の教育制度が取り入れられ，今の教室の在り方が出来上がりました。そして，みんな同じ「前」を向いて勉強するようになり，少数（先生）が大勢（生徒）に知識を伝えやすくしました。

普通ならこのような疑問をもつことはないと思います。しかし，そうした疑問をもつことで初めて自分なりの答えが見えてくるのではないでしょうか。「あたりまえ」と決めつけるのではなく，自分が納得できる答えを自分で考えてみると新しい発見があるかもしれません。

この本自体に正解が書かれているわけではありません。あくまで自分で考える機会を与えてくれるものです。また，同じ著者の本に『知的複眼思考法』（講談社）があります。これも，一つの物事に対して様々な角度から疑問を投げかける方法を紹介している本です。

一緒に読めば更に物事の見方は深まると思います。ぜひこの機会に“学校”というものを再発見してみませんか？

受験テクニックを身に付けるだけではない
教員を目指す仲間で競い合い高め合う中で
教員になるための自覚や力を養成すること

教員受験直前講習 2012

教員採用選考試験合格を目指して，今年も「直前講習」が開かれました。教育実習期間を避けて，4月11日（水）から7月11日（水）までの８日間，受講者46名が全10コマの講習に取り組みました。

講習内容は，●志願書・論作文●個人面接・集団面接●集団討論●模擬授業など，可能な限り受験先に対応したものにしました。

「集団面接」講習場面

受講してわかる自分の実力

教育・心理学科　第4学年　三浦　久奈（みうら　ひさな）

私が「直前講習」を受講しようとしたのは，教員採用選考試験の面接などの雰囲気を少しでも知っておきたいと思ったからです。面接試験については，正直に言って何とかなると考え，あまり心配をしていませんでした。

ところが，「直前講習」が始まり，本番を想定した面接練習の中で，焦りさえ感じるほど自らの力不足を思い知らされました。これまで自分が経験したことを素直に答えればいい場面でも，どう話せばよいのか分からなくなり，何度も言葉がつまることがありました。

担当の先生方のヒントやアドバイスをもとに，練習を重ねることによって，ようやく，伝えたいことをうまく整理して発言ができるようになってきた気がします。

また，個人面接といっても，グループ全体で取り組むので，自分以外の受講者に与えられた質問や課題についても，自分のものとして考えたり他の受講者の返答内容を参考にしたりすることでより力がついてきたように感じています。

もし「直前講習」を受講せず，自分の実力に気づかないまま採用試験に臨んでいたら・・・その結果は無残なものになってしまうことは明らかです。「論作文」や「面接」，「教育実践力テスト」の講習を通して，単なる受験対策だけでなく，教師になるための自覚や能力も身につけられたように思います。

教員採用選考試験受験者は迷うことなく，自らの可能性を広げるために「直前講習」を受講し，パワーアップを図ってください。

これからの予定

◆ **教員採用試験対策「面接・論文」セミナー**

【日程・時間】 8月3日(金)14:00～15:00・9月19日(水)10:00～12:00

【 対　象 】 幼稚園・小学校教員採用試験を次年度受験予定の学生で，試験対策としての面接・論文セミナーの受講を希望する者。

◆ **「ピアノ」セミナー**

【日程・時間】 申込書の日程表で空欄になっている時間帯

【 対　象 】 幼稚園一種・小学校一種教員免許状取得を希望する学生で次年度以降の教員採用試験突破に向けてピアノ技術の向上を目指す者。

※ 上記セミナー申込締切　7月20日(金)17:00

◆ **教員採用試験志願書記入説明会（第3学年対象）**

9月12日(水)　滋賀県・大阪府・大阪市

9月13日(木)　京都府

9月14日(金)　京都市

9月19日(水)　その他の府県

◆ **採用試験二次対策（一次試験突破者）**

8月9日(木)・10日(金)・17日(金)・18日(土)

9:00～17:00 教職支援センター開室

（アドバイザー在籍は13:00～17:00）